

今回の東京方面企業大学訪問では、一日目にディレクトフォース、国立がん研究センターの訪問、OB,OGとの懇談会二日目に東京大学のオープンキャンパスに参加した。これから将来を考える上で大切なことをたくさん学ぶことができた。

1日目の午前中には笹川平和財団・ディレクトフォース共催夏季プログラムが行われた。

初めに元世界エネルギー機関(IEA)事務局長の田中伸男様よりご講演を頂いた。田中伸男様はアジア人として初めてIEA事務局長に就任し、現在は笹川平和財団の理事長をしておられる。講義の中では、まず石油をより高く売り、利益を出したいと考える産油国の国々と、石油の価格を安定させたいIEAの関係とIEAの仕事についてお話いただいた。現在、中東では、サウジアラビアとイランが国交を断絶するなど対立が続いている。中東は、世界有数の産油国であるため、対立は石油価格に大きな影響を与えるそうだ。田中様は、日本の元首相である小泉慎太郎氏や麻生太郎氏、現首相の安倍晋三氏など私たちがよく知る政治家らとの写真も見せてくださり、国際機関での立場などには国内での評価も関わってくるということがよくわかった。滅多にお話をお聞きすることのできない方のご講演であったため、とても興奮した。

ご講演の後、笹川平和財団、日本財団、ディレクトフォースの皆さんとグループセッションを行った。

グループセッションで、私は林茉莉子さん、藤村峯一さん、角田智彦さん、金子祥三さんとお話をさせていただいた。

このグループセッションで、私は、大きく分けて2つのことを学ぶことができた。

一つ目は、「外国語を学ぶ上で大切なこと」だ。

外国の言語を学ぶときにはやはり現地に行って、慣れるのが良いとわかった。また、現地に行くことで、普段日本に居ては味わうことのできない「自分が外国人になる」という体験ができ、日本に帰ってきてからも外国人の気持ちがよく理解できるのだそうだ。このお話を聞いて、私はさらに外国に長期間行ってみたいという気持ちが強くなった。

二つ目は、「これから私たちが働いていく上で大切なこと」だ。

これからの社会では、外国人と共に働くことが多くなるだろう。まず外国人と共に働く上で大切なことについてはだが、最も大切なことは積極的にコミュニケーションをとることだと分かった。外国人とコミュニケーションをとるために、その人の国について情報収集をしていたという方もいた。国際社会で生き延びていくためには、殻に閉じこもってしまふのではなく自分の意見を進んで発言することが重要だと皆さんおっしゃっていた。しかし自らや、自国の考えを押し付けるようにしてはいけない。外国には少なからず日本とは違う点があるということをしつかり理解し、心にとめておくことが重要だ。私は将来国

際機関で働くことに興味を持っているので、田中伸男様のお話、グループセッションでの皆様の体験談はとても興味深いものだった。

1日目の午後には班ごとの企業訪問が行われた。

私たちの班は日本で最先端の癌研究を行なっている「国立がん研究センター研究所」を訪問した。この企画が始まってから初めて訪問先として選んだ場所であったのでお受けいただけるか心配であったが、快くお受けくださったのでとても嬉しかった。

研究所でまず初めに驚いたことは、病院併設の研究所にも関わらず、医師でない研究員の方が多くいらっしまったことだ。私たちがお世話になったゲノム生物学研究分野長の河野隆志さんも、京都大学薬学部出身の方だ。

今回の訪問では、6名の先生方に自己紹介という形でスライドを見せていただき、質問をしてから、研究所の見学をさせていただいた。

先生方には、自己紹介の中で、資格というものは人生において必ずプラスになるということ、医師になった後には私たちが想像しているよりもはるかに多い進路があるということ等たくさんのことを教えていただいた。

その後「がんというものを対症療法ではなく、本当の意味で予防することはできるのか」、「個別化医療のメリットはどんなところか」という質問をした。

前者については、難しいであろうというご意見だった。酸素が存在している限りDNAが傷ついてしまうのを防ぐのは難しいことである。しかし、ウイルスを防ぐということによる予防は十分に効果があるそうだ。私はこの質問の中で先生がおっしゃっていた「自分たちの目の前には患者がいるからその人たちをどう助けるかということに必死だ。」という言葉に感動した。医師という職業にはとても興味を持っているのでも医師になることができたら、国立がん研究センターの先生方のように病気や患者のために必死になれる医師になりたいと思った。

後者の質問について、個別化医療はオーダーメイドな治療のことで、国立がん研究センターの病院で勧められている治療法である。個別化医療のメリットは、遺伝子検査をして、その人に合う治療をするため、効果が高いことだ。検査をした時点で薬の存在するような遺伝子異常の場合しか対応できないことがデメリットだ。

研究所の方々は、私たち高校生のために貴重なお時間を取ってくださりお話はとても興味深く面白いものだった。

このような経験はおそらく一生に一度なので、大切にしたい。

1日目の夜には、OB,OGとの懇談会が行われた。

仙台二高を卒業し、東京の大学に進学された方々との懇談はとても楽しく、勉強面での悩みがすっきりし、大学生活の様子もよく知ることができた。

先輩方が、皆口を揃えて言うのが「自分の好きなこと、興味のあることをやれ！」ということだった。私はそれまで、自分が本当に好きなことはどんなことなのかということについて殆ど考えてこなかったため考え直す良い機会となった。

東京医科歯科大学歯学部を卒業し、現在は歯科医師をしておられる渡辺さんは、「入るのが難しいから」や「近いから」といった安直な理由で大学を選ぶのは絶対にやめたほうがいいとおっしゃっていた。二高生の特徴としてなんとなく東北大学を受けるといふものがある。私も例外でないような気がしていたので、なぜその大学に行きたいのか明確な理由を持ちたいと思った。

また、仙台の人口は約 100 万人、東京都 23 区の人口は約 1,000 万人、世界には 70 億人もの人がいる。大学に行く目的として「人に出会う」ことがある。どんどん広い世界に出て行こうという先輩の言葉には頷かされた。

最後の OB,OG の方々から一言ずつもらう時間の際に伊澤さんが仰っていた「私は授業で寝たことはありません。なぜなら寝るような授業には行かないからです。皆さんも興味のあることをどんどんやってください。」という言葉が心に残っている。あの言葉はたまたまなくカッコよかった。

2 日目は東京大学のオープンキャンパスに参加した。

私は定員制企画の「シナプス伝達を見る」という医学部医学科コースの模擬講義を受講した。

講義の内容は非常に難解なものであったが、最も心に残り、納得したのは統合失調症、自閉症の話の最後に先生が仰った「病気の人がいることで、正常がどういうものなのかを知ることができる。」という言葉である。この言葉を聞いて、私は衝撃を受けた。今までは病気は正常から逸脱した状態だと考えていたため、正常からどれだけ離れているかということが重要なのだと思っていた。この講義によって私は「物事には実に様々な見方があるのだ」ということを再確認できた。

今回東京方面企業大学訪問に参加し、自分の視野が広がったということを実感した。世界に 70 億人の人がいれば 70 億の考え方があると思う。今回はディレクトフォースの皆様、東京に進学された OB,OG の先輩方、国立がん研究センターの先生方など特に優秀な方々の考えを聞くことができた。

今回の企画に参加したことによって二高生という存在は周囲の人々から期待されているということも肌で感じた。少しでも多くの人々の期待に応え、これから長いけれども一度しかない人生を悔いのないものにするため、努力を惜しまず、自分の可能性を磨いていきたいと決意を新たにした。

